

6. 緑の評価と課題の整理

富田林市の様々な緑の現況と評価を通して、緑の課題を整理します。

(1) 富田林市の環境の骨格を形成する緑の評価と課題

富田林市の環境の骨格を形成する緑は、もともと富田林市が持つ地形・地質条件等の自然的基盤に基づいて形成された緑であり、大きなスケールで富田林市の地域特性を示す緑です。ただ、市街地の整備により改変されたことにより、緑の本来の連続性が失われたところもあります。今後の緑の形成においては、そういった骨格を形成する緑の保全や再生が課題となります。富田林市の環境の骨格を形成する緑としては、以下の緑があげられます。

嶽山・金胎寺山の緑

二上層群及び花崗岩類からなる嶽山・金胎寺山を中心とした東南部の山系は、クヌギ、コナラ等の自然林により構成されており、比較的自然度が高い良好な樹林帯を形成しています。富田林市を代表する山の緑として重要であり、今後、緑地保全とともに富田林市のシンボリックな緑として利活用を図っていくことが望まれます。

丘陵斜面林の緑

北西部や南東部には、古大阪層群や大阪層群からなる丘陵地が広がっています。南東部の丘陵地は比較的緑が残されていますが、北西部の丘陵地の緑は市街地整備によって公園や社寺林、限定的な斜面緑地等を残すばかりとなっています。本来、ここには谷地田が入り込み、ため池等とあいまって良好な里山の緑を形成していたところです。このような丘陵地の斜面林は、市街地に近接した富田林市の身近な緑として維持・改善することで、その価値をさらに活かしていくことが期待されます。

市街地を縁取る石川沿い段丘崖の緑

既成市街地と石川沿いに広がる農地との境界部に位置する河岸段丘崖に沿って、かつては帯状に緑が連なっていましたが、近年の宅地化等により樹林帯が分断されつつあります。この緑はエコトーン()として生態的に重要な緑であり、そのなかには原生植生を保つ錦織神社の社寺林等も含まれます。

(用語解説)エコトーン:環境推移帯とも呼ばれ、樹林地と草地の境界や、海岸・湖岸等の水陸の境界のように、比較的短い距離の間で環境が移行する場所のことをいいます。狭い範囲に多様な環境を含み、生物の生息環境として重要な場所となっています。

石川河川軸

富田林市中央部を流れる石川は、富田林市の水と緑の環境骨格であり、市街地の形成を規定するとともに、のびやかなオープンスペースと多様な生物の生息環境となることで環境保全上貴重な緑の財産となっています。河川区域の一部が石川河川公園として整備されていますが、今後さらに、恵まれた自然環境の保全・復元・育成とともに、市民の貴重なオープンスペースとしての活用が望まれます。

(2) 富田林市の風土を表現する緑の評価と課題

富田林市の風土を表現する緑は、これまでの富田林市の長きにわたる歴史において、人々の生活の営みや文化により形づくられ、旧来より継承されてきた緑です。このような緑のなかには社寺林等の緑や農地の緑、里山の緑等があります。

社寺林の緑

美具久留御魂神社のシイ林、春日神社のシリブカガシ林をはじめとする社寺林は、富田林市の本来の自然植生が保たれた地域の風土を表現する貴重な緑であり、富田林市の指定保存樹林として5件の指定があります。美具久留御魂神社のシイ林は大阪府の自然環境保全地域にも指定され、富田林市の原生的な自然を今に伝えています。

文化財と一体となった緑

富田林市内には国指定史跡のお亀石古墳やオガンジ池瓦窯跡・新堂廃寺跡、甘山古墳といった貴重な文化財が存在し、丘陵地の斜面林やため池等の自然と一体となって歴史的な環境を形づくっています。お亀石古墳とオガンジ池瓦窯跡・新堂廃寺跡については、今後、市の教育委員会の主導により史跡の保全整備が行われることになっています。

農地の緑

石川沿いにひろがる農地は、農業生産基盤のみならず市街地の外縁を構成する緑地空間であり、市街地のヒートアイランド現象を緩和する等、富田林市の都市環境を支える重要な緑であり、市街化調整区域においては、多くの農地が農業振興地域・農用地区域として担保されています。農地は農業生産基盤としても生態系等の環境の保全機能としても重要であり、優良農地を中心として今後も保全していく必要があります。

里山の緑

富田林市内に残されている里地・里山空間は、ふるさとの景観や生態系の保全の上で重要な役割を担っています。近年、農をテーマとした農業公園サバーファームが整備されるとともに、各地で市民農園の取り組みが広がっていることもふまえ、それらを緑の空間として生かしていくことが望まれます。とりわけ、嶽山・金胎寺山系の樹林地は、富田林市のシンボリックな樹林地であり、多様な緑地機能を有する緑です。今後は、里山のシンボルとして緑の保全を推進するとともに、市民の緑の拠点として積極的な利活用を図っていくことが望まれます。

(3) 富田林市の暮らしの質を高める緑の評価と課題

大小の公園・緑地や街路樹は、市民の憩いやレクリエーションの空間、防災の拠点として市民の生活に潤いと安心を与えるとともに、身近な緑として市民生活の質の向上に寄与しています。一方で、民有地においては、緑化を推進することにより市民の手により身近に豊かな緑を形成させていくことが可能となります。

大規模な公園・緑地

富田林市における広域的・基幹的な公園・緑地としては、市街地に近接して府営錦織公園ならびに府営石川河川公園があり、豊かな自然生態系を有した市民の自然レクリエーション拠点となっています。南部には、総合スポーツ公園と農業公園サバーファームが整備され、多くの人が訪れています。

身近な公園・緑地

自然発生的に時間をかけて形成されてきた既成市街地()と計画的に開発されたニュータウンとでは、都市公園等の配置において大きな差が見られます。今後、既成市街地に対しては住区単位で必要な量の都市公園等の整備を行っていく必要があります。また、既成市街地()内には一定量の生産緑地や社寺林等の緑が存在し、隣接部では広大な農地空間や石川河川敷が広がっていることから、これらの緑を緑の資源として保全・活用を図りながら総体的にバランスの取れた緑の配置を行っていくことが望まれます。

(用語解説)既成市街地:都市計画法による既成市街地は、人口密度が1haあたり40人以上の地区が連担して3,000人以上となっている地域とこれに接続する市街地をいいます。一般には、都市において、道路が整備され建物が連担する等、既に市街地が形成されている地域をいいます。本計画においては、丘陵地のニュータウンを示す新市街地との対比の意味合いで、旧来からの市街地のことを、以降において既成市街地と呼ぶことにします。

学校グラウンドや公共施設のオープンスペース

小学校のグラウンド等は、休日は一般市民に利用され、身近な市民のスポーツ活動やレクリエーション活動の場となっています。また、災害時においては、市民の一時避難地として防災上重要な役割を担うことから、十分なスペースの確保とアクセスの向上が課題となります。

生産緑地

市街化区域内において保全する農地は生産緑地地区として指定しています。生産緑地地区は市街地内の貴重なオープンスペースとして、また、防災面でも火災時の延焼抑制等の役割を担う緑地として保全を図っていく必要があります。

街路樹・緑道

新市街地をはじめとする歩道の街路樹や緑道の植栽は、都市の生活空間における身近な緑として環境保全や景観形成の面で貴重な緑となります。富田林市においてはグリーン・ハーモニー・プラン等によってこれまで緑化が推進されてきましたが、相当の年月の経過とともにそれらの樹木の維持・更新の必要性が高まっています。

住宅や施設周りの緑化推進

市街地においては、総じて緑の量が少なく、人工的で潤いのない環境となりがちです。そこで、道路や学校等の主要公共施設、工場等の大規模民間の事業所や個人の住宅地等においては、緑化を推進することにより、良好な景観や快適な生活環境の形成を目指した取り組みが必要です。

公共用地においては、富田林市はこれまでも公共施設の緑化推進に力をいれてきました。また、記念植樹事業については、現在、明治池公園の一部を開放し547本の樹木を植栽しました。

私有地の緑化に関しては、現在、富田林市開発指導要綱や大阪府自然環境保全条例に則り緑化を推進しています。それ以外の私有地に対しては、「みどりの基金」事業の一環として、緑化推進事業助成金交付制度を設け、住宅地や事業所敷地内への生垣等の設置を推進しています。

今後は、地球温暖化対策や都市のヒートアイランド対策といった今日的な環境問題の視点からも、市街地内の緑化推進についてよりいっそう取り組んでいく必要があります。

緑のネットワーク路

河内ふるさとの道や東高野街道等の既存の自然道や石川のサイクリングロード等は、富田林市内各所の緑を結びつけるネットワークの要素となります。人々がそのようなネットワーク路を活用することにより、緑とのふれあいの充実や余暇活動の展開が可能となります。

(4) 市民との協働にもとづく緑づくりに向けての課題

私有地の緑化推進をはじめとして、富田林市の緑豊かなまちづくりにおいては、公共の整備だけでは不十分であり、緑の育成の観点も含めて市民とともに推進していく必要があります。そのため、市や市民、事業者等が各々の役割をふまえたうえで、緑づくりを進めていけるような仕組みづくりが必要です。